発達障害を併せ有する聴覚障害児への理解と支援

―「ダンボ」の活動を通して―

企画･司会者　大鹿　綾（筑波技術大学　障害者高等教育研究支援センター）
話題提供者　喜屋武睦（東京学芸大学大学院連合）
鈴木友里恵（東京学芸大学大学院）
池田早希（埼玉県立和光特別支援学校）
指定討論者　森せい子（社会福祉法人聴力障害者情報文化センター）

KEY WORDS: 聴覚障害　発達障害　継続的支援　ＮＰＯ法人

【企画趣旨】

〈大鹿〉 聴覚障害児は、聴力、コミュニケーション手段、言語力、家庭・学習環境などに個人差が大きく、また従来より､聞こえにくさ故に読み書きの力が充分に育ちにくい、思考力が深まらない者が少なくない､注意が持続しにくい、ずれてしまったりする、社会性が育ちにくいなどの二次的困難が指摘されてきた｡一方で､聴覚障害児としての支援、教育を受けてきたものの、聴力などに比して、学習面や行動面に著しい困難を示す者の存在が注目されるようになってきた。彼らに対して「聞こえないから仕方がない」､「これまでの教育が不十分だった」と捉えるのではなく、発達障害という新たな視点から支援を考えることは、聴覚障害児教育の可能性を広げることではないかと考える。2012年に聾学校校長会と大鹿らが行った調査では、ろう学校の79.2%で｢発達障害を重要な課題｣と考えており、49.5%は実際に研修や他機関との連携など実施しているとの結果で、学校現場においても関心が高まっていることが示された。そこで本シンポジウムでは、発表者らが行う発達障害のある聴覚障害児への指導会「ダンボ」の活動を通して、彼らへの今後の教育的可能性と課題を考えたい。

【話題提供者の趣旨】

〈喜屋武：ダンボの活動について〉 ダンボは 2005 年から毎年 10 名前後の小学校段階の聴覚障害児を対象として活動しており、現在は NPO 法人の活動の一つとして実施している。対象児は発達障害様の何らかの困難を示す者で、コミュニケーション手段や在籍校は様々である。東京学芸大学生を中心とした学生スタッフ、現職の教員スタッフが対象児一人に対して 4～5 名程度のチームを組み、年間 16 回程度の継続的介入を行っている。学生スタッフには教員養成の一環としての意味合いも強く、手話や聴覚障害児とのコミュニケーションのみならず、アセスメント、指導目標・教材の作成、指導、保護者とのやりとりなど当日以外の準備も多く充実感がある一方、負担感も少なくない。大学での単位化などのメリット、スタッフの安定確保は検討課題である。また、対象児への指導を行っている間、保護者を集めた座談会を行っている。大学教員からの情報提供のみならず、保護者同士の情報交換の場として重要な役割がある。在籍校との連携に関しては連絡ノートの活用、一部の学校とは直接のケース会議を実施している。

〈鈴木：事例報告〉 ダンボに 1 年時より参加するろう学校 3 年生男児について 3 年間の記録より報告する。ADHD 様の困難があり、3 年当初には以前と比べて一方的に話し続ける様子は減少し、落ち着いて行動できるような場面が増えてきた一方、本人にとっては良かれと思って友達に余計な一言を言ってしまい、トラブルになることがあった。3 年時では動画を用いた SST を行い､ロールプレイや本人が意識していないような場面で課題状況を作るなどの支援も行った。以前は一つの考えに固執する場面もあったが､｢お互いに謝る｣｢自分も悪いところがあった｣など立場を変え、柔軟に考えられるようになった。また、自ら「冷静になるという目標を立てた」と話す、トークンがなくてもごく弱いキューで行動を意識できるようになった等、a 児なりに気持ちをコントロールしようとする様子が見られるようになった。まだ自由場面では焦ると固まってしまったり、設定場面のようには行動できない場面もあるが、徐々に意識的に行動できる場面も増えてきた。また、保護者の記録を見ると、初めは保護者自身が悩む記述が多かったが、徐々に a 児の成長を見付け喜ぶ、服薬の検討を始めるなど、よりポジティブな記述が増えていった。

〈池田：教員スタッフとして〉 教員スタッフの役割としては学生スタッフだけでは難しい、見通しを持った指導目標の設定、指導場面での工夫のサポート等がある。事前に相談して作成した指導案に基づき、学生スタッフが中心となって実際の指導を行うが、想定外の流れになった時にサポートしたり、時には教員スタッフが MT として指導を行うこともある。休日の参加で負担を感じるときもあるが、アセスメントに用いる検査の実施方法などは通常の職務の中では中々学ぶ機会がないため、自分自身の研鑽にもなっていると感じる。また、学級運営の中では一人の児童に対してじっくりと考える時間を取りづらいが、ダンボでは改めてその機会の重要性を実感し、学生と共に指導を考える中で普段の自分の指導を振り返る場になっている。連携の取れている学校ではダンボへの参加の一部を出勤とし、長期休暇に代休を取るということをしており、土日の活動の支援と教員の休養のバランスに対する工夫が始まっている。

【指定討論者の趣旨】

〈森：今後の課題と成人期の問題〉 聴覚障害成人の相談支援事業の現場には様々な相談が多く寄せられているが、その中には精神疾患、またその根底には発達障害が疑われるケースは少なくない。しかし、それまでの教育の中で発達上の課題について見過ごされてしまい、適切な理解、サポートを受けられないまま問題が複雑化し、成人に至っているケースにおいては、本人のみならず家族も含めて非常に困難な状況となることがある。ダンボの活動を通して早期に課題を発見し、理解、支援をしていくことはライフスパンで考えたときにも大きな役割を果たしていると考える。成人期の問題から児童期を振り返り、今後の課題を整理したい。

(文献)大鹿綾,稲葉啓太,渡部杏菜,長南浩人,濵田豊彦(2014)発達障害に関する第二回全国聾学校調査について－第一回調査との比較を中心に－.聴覚言語障害,42(2),51-61.

(OSHIKA Aya, KYAN Chikashi, SUZUKI Yurie, IKEDA Saki, MORI Seiko)